

2012 年度 連結業績
国内機関投資家・アナリスト向けカンファレンスコール Q&A(要旨)

日 時: 2013 年 5 月 20 日 18:00～19:00

回答者: ソニーフィナンシャルホールディングス 専務取締役 渡辺 寛敏

ソニー生命 取締役 小泉 光廣

ソニー損保 代表取締役社長 丹羽 淳雄

ソニー銀行 代表取締役副社長 鈴木 隆行

※内容については、理解しやすいよう部分的な加筆・修正および QA 順序の並べ替えをしております。

【Q&A】

Q1【ソニー生命】

ソニー生命の 2013 年 3 月末の MCEV について、金利低下の影響が想定より小さい。2012 年 12 月末からみると金利水準が低下し、イールドカーブがフラット化している。開示されている金利センシビリティでは金利低下の平行シフト分のみ織り込まれているが、金利のフラット化の影響についてはどのように理解すればよいのか？

A1:

まず、2013 年 3 月末の MCEV は、金利低下の環境下ではあったものの、新契約の順調な獲得の一方で、ソニー生命が今まで行ってきた ALM が功を奏して金利リスクを抑制できたことにより、全体でプラスになったことをお伝えしたい。ご質問の件だが、2012 年 3 月末のフルレポートで開示しているセンシビリティで検証してみても、金利低下だけではなく、フラット化による影響でそれなりの減少額が検証できている。詳細については 5 月 27 日に予定しているフルレポート開示後にご説明する(※)。

(追加質問: 今後、金利が逆にスティーピング化する局面において、大幅なプラスの影響は期待できないか？)

今回フラット化していることによるマイナスの影響は明らかにあるため、逆に超長期金利が上昇し、スティーピング化したということになれば、それなりのプラスの影響があると考えている。

(追加質問: 金利のイールドカーブのフラット化だけで 2013 年 3 月末 MCEV へのマイナス影響はどの程度か？)

詳細については 5 月 27 日のフルレポート開示後に説明する(※)。

(追加質問: 経済価値ベースのリスク量の内訳を開示していただけると投資判断に有益と考えるが、開示の方針は？)

リスク量の中身の開示については、皆さまの解析に役立ち、また我々の会社をご理解いただくことにつながると考えている。今後の情報開示については、前向きに検討していきたい。

(追加質問: ソニー生命が MCEV を計算するためのリスクフリーレート 40 年超の金利の取り方など、(金利の前提条件の置き方に)何らかの変更はないか？)

変更はない。

(※補足説明) イールドカーブの形状の変化、すなわちフラット化やスティーピング化に限定した変動要因分析やセンシビリティの計算は行っていない。平行シフトを前提とした金利センシビリティからの推計を行う際には、40 年金利の変動を用いて計算した場合が比較の実態に近い結果になる。

Q2:【ソニー生命】

MCEV において、物価連動国債を用いたブレークイーブンインフレ率の上昇による悪影響は通期ではいくら発生したのか？

A2:

約3百数十億円。

Q3:【ソニー生命】

MCEV について、ブレークイーブンインフレ率を使用しているということは、MCEV の計算の中に将来のインフレに伴うコストを先行して反映しているという考え方で良いか？

A3:

その通り。将来発生が見込まれるインフレに伴うコストを、現時点の MCEV の中に織り込んでいることになる。

Q4:【ソニー生命】

MCEV について、保険関係の前提条件を変更しているかどうかを確認してほしい。

A4:

保険関係の前提条件については、毎年実績をベースに見直しをしており、今回も見直しを行った。死亡率や継続率が良い方向に向かっているため、プラスのインパクトを約500億円とみている。

Q5:【ソニー生命】

ソニー生命の新契約獲得動向について、例年、4Q(3カ月)は3Q(3カ月)よりも減少するという季節性があるが、今回伸びている背景には料率改定前の駆け込みがあったのではないかと。駆け込みの部分を除いたベースで考えてみると4Qは前年比でどうなっているのか？

A5:

4Qにおいて、料率改定の影響もあり、新契約獲得が増加した。この駆け込みの影響については、どの商品を駆け込みと見るかによって数字が変わってくるため特定は難しいが、仮に、予定利率の変更により保険料が値上がりとなった商品を除いて概算してみると、新契約高ベースで前年同期比約10%の増加になる。具体的には家族収入保険など、通常コンサルティングにより販売している死亡保障系の商品も伸びているため、4Qについては駆け込みがなくとも非常に順調に業績を伸ばしたと言える。

(追加質問:駆け込みの可能性のある商品を除いたベースでも順調に業績を伸ばしたということだが、その背景には足元のライフプランナー数の着実な伸びが影響しているのか？)

ライフプランナー数もそうだが、「生命保険料が値上がりになる」というような報道等もあり、お客さまの保険商品への関心も非常に高まっていたと思う。そのような環境下において、新契約のご相談にしっかりお応えし、アフターフォローを徹底したことが、駆け込みの影響を除いたとしても、新契約高の増加につながったと認識している。

Q6:【ソニー生命】

標準予定利率改定に対応した商品改定によって、責任準備金の繰り入れ負担が増え、利益が押し下げられるということだが、契約当初に責任準備金の繰り入れ負担が大きくなるということは、将来、法定の利益に貢献するという考えでよいのか？

A6:

その通り。契約期間を経て、将来、利益に貢献する。

Q7:【ソニー生命】

ソニー生命のライフプランナー数について、1年前に発表され中期経営計画の目線よりは下回っているように見えるが、2013年3月末の人員数について、どのように評価しているか、また2013年度はどのように採用・在籍数を見ているかを教えてほしい。

A7:

採用については、この数年着実に伸びてきている。2012 年度についても、採用は 370 名で、2010 年度ごろの状況と比べるとかなり伸びてきている。採用が伸びているにも関わらず、2013 年 3 月末のライフプランナーの在籍数が 4,119 名と前年度末比で伸び悩んでいるのは、退職者が約 300 名と大幅に増加したためである。ソニー生命としては採用・育成を重視して施策を打っており、営業所長の数も着実に増加していることから、2013 年度は 2012 年度以上の採用を見込んでいる。一方、退職者数については、2012 年度並みの 300 名前後を想定している。ライフプランナーの在籍数については、これからも着実に伸ばしていくことができると考えている。

一方、2015 年 3 月末で 4,400 名という 1 年前に設定した中期目標を見直すかどうかについては、来月開催予定の経営方針説明会の中でお話させていただきたい。

Q8:【ソニー損保】

EI 損害率について、今期の計画はどのくらいか？

A8:

2012 年度の自動車損害率は、3Q までは保険金単価の増加により上昇したが、4Q (3 カ月) では前年同期比で約 4pt 低下しており、損害率の低下傾向がみられ、4 月も同様の状況だった。これは、事故件数の伸びが保険料の伸び以下に落ち着いたこと、保険金単価の上昇が止まっていること、2012 年 11 月と 2013 年 4 月の保険料値上げの効果などが理由と考える。

2013 年度については、料率の見直しやこれまで申し上げてきた施策などにより、2012 年度に比べると E.I. 損害率で約 3pt 低下すると見込んでいる。

Q9:【ソニー損保】

E.I. 損害率について、トップラインの伸びに比べて、販管費の伸びの方が大きく、コストの逆レバレッジが起きているのではないかと。広告を打っても、トップラインの増加につながっていないのではとも思われる。広告を積極的に投下している他のダイレクト他社との競合環境を知りたい。

A9:

ダイレクト各社間との競合については、価格面や広告の投下量での競争という環境に変化はない。ソニー損保は 2012 年 11 月および 2013 年 4 月の自動車保険の値上げを先行して実施しており、価格競争力の面で厳しい状況である。2013 年度の見通しについては、他社の動向は不透明であるが現在の状況が続くという前提で、保険料の伸びは 5% 程度と見込んでいる。

事業費率の上昇については、直近 2 年くらいでシステムをリニューアルしたことに伴うシステムの減価償却費の負担増が主要因。

Q10:【ソニー損保】

4Q において受付事故件数が減り、保険金単価も今までの上昇傾向が見られなくなったということだが、支払備金が増加し、E.I. 損害率も悪化していることとの関係性を、どう理解すればよいのか？

A10:

4Q の事故件数については、増加率が保有契約件数の増加率に比して低いということであり、件数が減少したということではない。保険金単価についても、上昇は止まったものの下がっているということではない。支払備金の増加の主な要因については、人損系の事故の最終損害額認定への進展が高まっていることによって IBNR 備金を積み増したことで、事案が長期化する傾向にあることも影響していると思われる。

(追加質問: 今期は改善するのか？)

4Q 以降は保険金単価の上昇が止まっており、その傾向が続くと見込んでいる。保険料の値上げ効果もあり、今期は改善する予定。

Q11:【SFH】

SFH の 2013 年度の連結業績予想について、連結経常利益の主な減益要因が合計で約 150 億円という説明があったが、主な要因である変額保険の最低保証に係る責任準備金の繰り入れ負担の増加と標準利率改定の影響額は、内訳としてどのくらいのイメージを持っていればいいのか？

A11:

およそ半々くらいのイメージでご理解いただきたい。

Q12:【SFH】

2013 年度の配当予想の考え方について確認したい。中期的な配当性向目標として、連結当期純利益の 30%～40%を目安としているが、現状の予想では 30%を下回っている。仮に連結当期純利益が上ぶれた場合、1 株あたり配当金が 25 円のままだと目標とする配当性向を更に下回ることになる。1 株あたり配当金を決めるに際しての考え方を教えてほしい。

A12:

中長期で配当性向 30～40%を目安としている。現時点においては 2012 年度と同じく1株あたり配当金を 25 円としているが、2013 年度の配当については今後の業績や経済環境などを総合的に勘案して判断したい。

以 上